



Blue
Planet
Prize

2002年6月13日
財団法人 旭硝子財団

2002年(第11回)「ブループラネット賞」の受賞者決定!

植物生理生態学を開拓して、植物生態系が環境から受ける影響を定量的に把握し、その保全に尽力してきた

ハロルド・A・ムーニー博士
(米国)

地球環境問題を世界に先駆けて科学的に究明して、問題解決を国際的に重要な政治議題にまで高めた

ジェームズ・ガスターヴ・スぺス氏
(米国)

財団法人旭硝子財団(理事長 瀬谷博道)の地球環境国際賞「ブループラネット賞」は、今年で11回目を迎えました。本賞は、地球環境保全に関して科学技術の面で著しい貢献をされた個人、または組織を対象として毎年2件贈られるもので、当財団理事会・評議員会は本年度の受賞者を次のように決定しました。

1) ハロルド・A・ムーニー博士(米国) スタンフォード大学生物学部教授

植物生態系の研究に生理学的手法を導入して、植物生理生態学を開拓し、自然、あるいは人為的な環境変化により植物生態系が受ける影響を定量的に把握する方法を提供しました。さらに、国際的な交易等により生物種の生息地が広がる問題をはじめ、生態系に関する多くの国際共同研究の立上げに尽力し、地球生態学(Global Ecology)の確立に貢献するとともに、その成果を環境政策に反映させるに当たって指導的な役割を果たしています。

2) ジェームズ・ガスターヴ・スぺス氏(米国) エール大学森林・環境学部長

環境問題の解決に極めて重要な役割を果たす組織の創設と育成に生涯を捧げています。自然資源防衛委員会(NRDC)設立に貢献した後、1980年カーター大統領・環境問題諮問委員会委員長として報告書『西暦2000年の地球』の中で地球環境問題の予告に寄与しました。1970年代に既に気候変動問題への対策を提唱した先駆者の一人であり、世界資源研究所(WRI)を設立し科学的データを基盤とした政策研究を指導しました。その後、国連開発計画(UNDP)総裁として人間を尊重する開発を推進し、現在は、エール大学・森林・環境学部長として環境に関して最初で真の地球規模の学府を築くために尽しています。

●二人の受賞者には、賞状とトロフィー、および副賞として各5千万円が贈られます。

●表彰式は11月14日(木)に東京會館(東京都千代田区)で挙行され、翌11月15日(金)に受賞者による記念講演会が国際連合大学(東京都渋谷区)で開催されます。

※本リリースは、インターネットでも6月17日からご覧いただけますので、ご参照ください。

(財)旭硝子財団

〒102-0081 東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ2F TEL(03)5275-0620 FAX(03)5275-0871

E-Mail: post@af-info.or.jp

URL: http://www.af-info.or.jp

*再生紙を使用しています。

受賞の辞

ハロルド・A・ムーニー博士

2002年度「ブループラネット賞」の受賞者に選ばれましたことに、心から感謝申し上げます。素晴らしい業績の歴代受賞者の仲間に加わることができまして、大変光栄に存じております。旭硝子財団が、より良い地球環境を目指して本賞を設立されたことに、深い感銘を受けております。

世界人口は、2050年までに100億人に達すると予測されていますが、人口が増えますと私達の生命を維持している天然資源はますます消費され、地球環境に大きな悪影響を及ぼします。したがって、地球環境の行方を深く懸念する旭硝子財団にならない、企業や個人等、社会のすべての構成員が環境保全を志向して、後続くことを念じております。振り返ってみますと、過去数十年間には、局所的に環境を改善したり、天然資源を持続させようとする、それまでみられなかった大きな努力がみられましたが、このような努力は、ほとんどが経済的に恵まれた国々によるものでした。豊かな国々が局所的に環境保全に取り組んでいるものの、地球環境は気候変化を含め、私達の安寧を脅かすほど劇的に変化しているのです。

地球が直面する危機を深く認識し、その改善のために貢献している旭硝子財団は、賢明な活動を続けられていると思います。

ジェームズ・ガスターヴ・スペース氏

権威あるブループラネット賞を頂き、厚く御礼を申し上げます。

これまでのところ、社会は地球環境の保全への挑戦に成功しているとはいえ、私達は極めて困難な状況に直面しています。経済活動の規模が巨大化したために、我々は地球にかつてないほどの悪影響を及ぼし、偉大な生命維持システムに深刻な打撃を与えています。

この深刻な状況下でも、絶望する必要は全くありません。一方で多くの望ましい兆候がみられます。たとえば、地球環境に関する科学的な理解が進み、人口増加は緩和し、貧困はわずかながら減少し、環境の大幅な改善が期待できる技術開発も進んでいます。さらに、市場の力を持続可能な社会に向けて活用する方法を私達は学びつつあり、国際環境法も著しく拡充されています。世界中の企業、NGO、地方自治体が、環境保全に向けて力強く主導するようになっています。

したがって、私達の使命は、これら全ての努力をかってない力で押し進めて行くことにあります。次の世代へのこの素晴らしい贈物こそ、持続可能で統合された地球をもたらすのです。私はブループラネット賞を受賞して、言い表せないほど喜んでおります。立派な組織から賞を頂き、偉大な歴代受賞者の仲間に加わることができたことは大変な名誉で、深く感謝申し上げます。

ハロルド・A・ムーニー博士 (Dr. Harold A. Mooney)

ムーニー博士は、カリフォルニア大学に入学して政治学を専攻しましたが、経済的事情から学業を断念し、南米航路貨物船の船員になりました。しかし、パナマ海峡を航海中に読んだ「米農務省植物実地踏査員」に関する雑誌記事が博士の進路を大きく変えることになりました。子供の頃からカリフォルニアの山々に親しみ植物に強い関心を抱いていた博士は、植物調査と冒険旅行が同時に可能な踏査員という職業に強く惹かれて、植物生態学の講座を設けていたカリフォルニア大学サンタバーバラ校に復学しました。

博士は、1957年にアラスカからロッキー山脈に至る広大な自然に生育する植物(Arctic-Alpine Plants)について、独自に開発した赤外線ガス分析装置を用いて、光合成と呼吸の動態解析を行ない、植物の生理特性を研究しました。さらに環境が人工的に制御された状況下と自然のままの状況下で生育した個体の特性を比較することにより、植物が局地的な生育環境に依存して、生理特性を適応させてきていることを明らかにしました。

1960年に博士号を取得した後、博士は、同一の厳しい生育条件のもとでは、異なった植物種でも類似の生理特性をもつようになる「収斂進化」について研究しました。植物の生育にとって比較的厳しい地中海性気候にある、地理的に離れているカリフォルニア地域、チリー沿海部や地中海沿岸の植物の生態系ならびに生理特性を比較して、「収斂進化」が、それまで判明していた「形態」(form)にとどまらず、「機能」(function)においてもみられることを見出し、高い評価を得ました。

1970年代には、カリフォルニア地区にある砂漠から山地(White Mountains)にいたる植物について、光合成特性や植物体内の異なる機能の部位への炭素源の配分の仕組みを解明するために、植物生理に“経済概念”である利益とコストの考え方を適用しました。植物が炭水化物、窒素分などを獲得し、あるいは分配して養分を貯蔵する場合のコスト解析を詳細に進め、最小のエネルギー消費で最大の効果を得るような挙動をとることを明らかにして、カーボン収支の研究を深化させ、その後の植物生理生態学の研究に大きなインパクトを与えました。

上記の研究によって、博士は植物や植物群が環境にどのように反応するかを解明する植物生理生態学の理論的な枠組みを構築することに貢献し、植物とその生態環境との相互作用を評価するという目的にかなう研究手法を提供することに成功しました。そして、これまでに400篇に上る学術論文および著書を発表しています。

1980年代後半には、環境問題科学委員会(SCOPE)の下、自然の植生にたいする異種の植物種の侵入についての研究を行い、侵入種についての地球規模の評価を世界で初めて行いました。また国際的な交易が生物侵入種の問題を加速していることを深刻に受け止め、自然科学者と社会科学者との共同研究の必要性を訴え、多くの国際機関をパートナーとする国際プロジェクト“Global Invasive Species Program”を立ち上げ、人間活動がもたらす移入種の生態系への影響について課題を提起しました。

博士は近年、特に生物多様性と温暖化問題について国際的なリーダーシップを発揮すると共に、エコロジストならびに科学者の世界的なコミュニティやネットワークを構築したり、環境国際会議を提唱しています。国際地球圏生物圏研究計画(IGBP)では中心的な役割を務め、国際的な科学者の組織を構築し、その成果を環境政策策定のガイドラインにするための指導的立場に立っています。そして、科学委員会や国際学術連合(ICSU)の会長あるいは副会長として、多くの国際

研究計画を提案して推進しています。さらに、米国生態学会の会長として、エコロジーを経営に役立てることを目的とした新しい雑誌(Ecological Applications)を発行したり、国際生物多様性観察年(BOY)を発案するなど、科学的な課題に対しメディア等を通して一般の人々の関心を呼び起こすことに努めています。

博士は生態学が地球環境の変化の研究において重要な要素であることを示し、地球生態学(Global Ecology)の基礎を築きました。最近では多くの大学に地球生態学の研究部門が設立されるようになってきました。そして、人類が存続し続けるのに必要とされる新しい環境科学の発展のために尽力しています。

<略歴>

1932	6月1日米国カリフォルニアで生まれる
1957	カリフォルニア大学 Santa Barbara 校卒業
1960	博士号取得(デューク大学)
1960～1968	カリフォルニア大学 Los Angeles 校準教授
1968～1975	スタンフォード大学準教授
1975～	同 教授
1976～	同 Paul S. Achilles Professor of Environmental Biology
2000～2003	同 Senior Fellow, by courtesy, Institute for International Studies

<受賞歴等>

1961	Ecological Society of America, Mercer Award
1983	Merit Award, Botanical Society of America
1990	Ecology Institute Prize for Terrestrial Ecology
1992	Max Plank Research Award
1996	Eminent Ecologist Award, Ecological Society of America
2000	Nevada Medal of Science Award

ジェームズ・ガスターヴ・スペース氏 (Mr. James Gustave Speth)

スペース氏は、米国サウスカロライナ州の綿花生産地帯で農機具販売を営む家庭で育ち、エール大学政治学科を最優秀の成績で卒業しました。その後、ローズ奨学生としてオックスフォード大学で経済学を学び、エール大学ロースクールを1969年に卒業しました。おりしも1960年代後半は、公共福祉の向上を目指して学生運動が世界中で起こった時代でした。氏は、公共の利益となる法律分野にそのもてる力を注ぐことを決意し、環境を護るための法律に関わる非営利組織の設立を考えました。

そこで、エール大学ロースクールの教官や友人達と共に、環境問題の解決に取り組む組織、自然資源防衛委員会(NRDC)を1970年に設立するために尽くしました。氏は、最新の科学や経済の知識を背景にして訴訟を起こし、水質汚濁物質の規制、淡水湿地の保全、プルトニウム増殖原子炉プログラムの停止などを米国内で実現しました。設立以来30年間にわたり、NRDCは環境の質的保全に関して大きな影響力を持ち続けてきています。

NRDCでの役割が認められて、氏はカーター大統領の環境問題諮問委員会委員に指名され、1979年に委員長に就任しました。委員長として、地球規模の気候変動の脅威に対して一般国民の注意を喚起し、地球温暖化を未然に防ぐための行動を起こすよう繰り返し呼びかけました。1980年に公表した画期的な政府報告書である『西暦2000年の地球』は、米国各省庁が独自に所有してい

たデータとコンピューター・モデルを連関させ、21世紀幕開け時の人口、環境、経済発展の状況について解析したものです。同報告書では、2000年の地球環境が人口の増加圧、汚染の拡大化、資源の劣化などによって困難な状態に直面すると指摘しました。氏が主導した第2報告書では、これらの問題を緩和するための具体的な戦略を提言しています。『西暦2000年の地球』は広く認められ、未来予測のための基礎資料となりました。世界各国で大きな反響を呼び、150万部も売れました。

スペース氏は1982年に、民間の非営利の研究機関である世界資源研究所(WRI)を設立し、10年間所長を務めました。ワシントンに本部を置くWRIは、「社会はいかにして自然環境を持続可能な状況に保ちつつ、人間の基本的要求を満たすような経済的發展を達成できるのか」という根本的な問いに取り組むシンクタンクです。WRIは自然資源の持続的な管理を試みようとする開発途上国の政府やNGOに対して技術指導・援助も行っています。特に地球温暖化防止と生物多様性の維持に関する政策研究に熱心に取り組み、リオでの地球サミットにおいて、それぞれの重要な条約が採択されることに貢献しました。さらに、所長として、高く評価されている報告書『世界の資源と環境』シリーズの刊行を始めました。

1993年には130以上の途上国に支部を有し20億ドルを越える予算をもつ国連開発計画(UNDP)の総裁に就任しました。国際連合は氏に、国連開発グループ(UNDG)の初代会長に就いて国連機関の改革を遂行するよう協力を求めました。1994年に公表した『人間開発報告書』では、環境の安全保障を取り込んだ「人間の安全保障」という新しい概念を提唱しています。地球規模の「人間の安全保障」の概念とは、人間の安全を脅かす共通の問題(麻薬、テロリズム、伝染病、環境破壊、自然資源の枯渇、自然災害、民族紛争、難民の流出など)に対して対処するという考え方です。そして、各国政府に対して「核の安全保障」から「人間の安全保障」を保証する方向へと、根本的に政策を移行させる必要があることを強調したものです。

氏は1999年に、エール大学森林・環境学部長に就任して以来、氏のこれまでの豊富な素晴らしい経験を生かすことができる目標、即ち、環境に関して最初で真の地球規模の学府を築き上げ、そこにおいて世界中から集まる新しい世代の環境分野のリーダーを育成することを、追求しています。

<略歴>

1942	3月4日米国サウスカロライナ州で生まれる
1964	エール大学卒業
1966	オックスフォード大学バイオル・カレッジ卒業(経済学)
1969	エール大学ロースクール卒業
1970～1977	NRDC 主任専属弁護士
1977～1981	米国大統領環境問題諮問委員会委員(1979-1981委員長)
1982～1993	世界資源研究所(WRI)(1982年設立時より)所長
1993～1999	国連開発計画(UNDP)総裁
1999～	エール大学 森林・環境学部長

<受賞歴等>

1976	National Wildlife Federation's Resources Defend Award
1992	Natural Resources Council of America's Barbara Swain Award of Honor
1997	Special Recognition Award (Society for International Development)
1998	Decorated by the Government of Senegal and Morocco
1999	Environmental Law Institute Award

本年度(第11回)の選考経過

国内1,100名、海外1,400名のノミネーターから132件の受賞候補者が推薦されました。候補者の分野は、多い順に生態系32件、気候・地球科学26件、複合領域17件、環境経済・政策16件などでした。

候補者は39カ国にまたがり、途上国からの候補者は21件あり、全体の16%に相当します。

選考委員会による数次の審査をもとに、当財団の理事で構成する顕彰委員会に諮った後、理事会・評議員会でハロルド・A・ムーニー博士とジェームズ・ガスターヴ・スペース氏が受賞者として正式に決定されました。

■ 本件に関するお問い合わせ先

財団法人 旭硝子財団
事務局長 国井宣明

東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ2階
TEL:03-5275-0620 FAX:03-5275-0871
E-mail:post@af-info.or.jp URL:http://www.af-info.or.jp

本リリースは再生紙を使用しています。

<両受賞者からのメッセージ>

日本の皆様へ

ハロルド・A・ムーニー博士

人類は、自然界の恵みを、生命を維持し生活を豊かにする資源へと変換してきました。人口が増大し、私たちの勤勉さが新しい局面を生み出すにつれて、生命維持に不可欠な天然資源の基盤を無視し、破壊するという危うい状況が生じています。私たちすべてが依存する製品やサービスの供給源である自然体系を育み、持続させることに心を傾けねばなりません。この責任は、社会の制度や組織ばかりでなく、私たちすべての個人も担うべきだと考えます。もし今細心の注意を払って自然体系を守らなければ、私たちは生命維持体系をさらに損なうばかりか、本質的に重要な生命を維持し開発する能力までも失いかねません。

ジェームズ・ガスターヴ・スベス氏

現在、複雑な京都議定書の検討作業を進めていますが、この議定書は、私たちを支えている地球気候を守る第一歩としての最大の希望の星です。これまでの私の道のりを振り返ってみると、1992年の地球サミットを成功に導くために果たした日本の重要な役割と、1990年代に私が国連に奉職した時期に日本が発揮した強いリーダーシップを思い起します。日本は、目下経済的には困難な時期にあるものの、創造性と革新を生み出す力、環境分野におけるリーダーシップと責任感、さらに世界の平和と協調を推進する力を現在も持ち続けています。